

Blitzen Times

August.2025
Vol. 94



Race Report

- 7.13 THE ROAD RACE TOKYO TAMA
- 7.19 全日本自転車競技選手権大会 MTB・XCC
- 7.20 全日本自転車競技選手権大会 MTB・XCO

ブリッツェン健闘

沢田が山岳賞と日本人最高4位

第2回「THE ROAD RACE TOKYO TAMA」がコーアシアツアー1・2へ昇格し盛大に開催。武蔵野の森公園から青梅駅前まで東京都多摩地域を舞台に、国内外の精鋭が集結。宇都宮ブリッツェンは沢田時が山岳賞を獲得し、日本人最高位の4位でフィニッシュ。熱戦の様子をレポートします。

7月13日、UCIアジアツアー1.2に昇格した「THE ROAD RACE TOKYO TAMA 2025」が、東京都多摩地域の一般道を舞台に開催されました。スタート地点は武蔵野の森公園。133・8キロにおよぶコースは、パレード走行11キロの後、さまざまな市街地を駆け抜けて青梅駅前がゴールとなる設定です。

山岳周回16・3×4周を含み、獲得標高は2、167mという過酷なコースに、国内外から92名の選手が集まりました。

ブリッツェンは岡篤志、谷順成、沢田時、武山晃輔、花田聖誠、フォン・チュンカイの6名体制。エースは岡、谷、スプリント力もある沢田と、戦略的な布陣で臨みました。スタート時の涼しい気候は選手たちの力を引き出し、序盤から果敢なアタックが繰り広げられます。11キロのパレード明け、武山が先頭で動き出し、続いて岡ら10数名が逃げ集団を形成。しかし山岳周回の手前で集団に吸収され、レースは激しい展開に。

その後、新たな逃げ集団に沢田が加わり、山岳ポイントを目指す展開へ。レース中盤、沢田は2度の山岳賞1位通過を果たし、総合11ポイントで見事山岳賞を獲得。先頭ではソリューションテック・ヴィーニファ

ンティニのロレンツォ・クアルトゥッチ選手とMC FUKUOKAのベンジャミ・ブラデス選手が抜け出し、勝負は両者の一騎打ちとなります。クアルトゥッチ選手が力強く優勝を飾り、2位はブラデス選手。3位には同じくソリューションテック・ヴィーニファンティニのキリロ・ツアレニコ選手が続きました。

沢田はスプリント力を活かし、最後の追走集団の先頭でゴール。日本人最上位の4位に入賞し、マウンテンバイクで培った力を発揮。武山ら仲間のサポートが逃げる展開を作り、チーム戦略がレースの流れを左右しました。岡、谷は追走集団で21位、22位。フォン、花田、武山も完走し、チームの力を示しました。

治道には数多くのファンが詰めかけ、ツール・ド・フランスさながらの盛り上がり。ブリッツェンは存在感を示す走りで見事表彰台に立ち、今後の挑戦への弾みとなりました。「THE ROAD RACE TOKYO TAMA 2025」は新たな歴史の1ページとなりました。

さらに山岳賞を獲得した沢田の快走は、国内外への強烈なアピールとなり、チームにとっても貴重な財産となった。次戦へ向け、ブリッツェンの挑戦はさらに加速していく。



沢田時、二冠達成！ 全日本MTB選手権 XCC/XCO連覇

沢田時が、7月19日・20日兵庫県菟浦谷森林公園で開催された第38回全日本自転車競技選手権大会MTBのXCCとXCO両種目で圧倒的な走りを見せ連覇。得意のスプリントと冷静なレース運びでライバルを制し、2日連続でチャンピオンジャージを獲得。沢田の今シーズンの躍進は止まらない。

7月19日、兵庫県たつの市の菟浦谷森林公園で第38回全日本自転車競技選手権大会MTB(XCC)が幕を開けた。ブリッツェンの沢田時は、昨年に続く大会連覇を目指し、万全のコンディションでスタートラインに立った。レースは1周700mを8周する計5・6キロのショートトラック。30人が出走する中、沢田は序盤から高橋翔(SPEED of sound)選手らと先頭付近で展開し、冷静かつ的確な走りを披露する。

1周目こそ2番手ながら、その後徐々に順位を上げ、3周目にはトップに。以降も北林力(Massi development team)・竹内遼(MERIDA BIKING TEAM)・平林安里(Team SCOTT TERRA SYSTEM)ら強豪と白熱したレースを繰り広げた。ときどき順位が入れ替わる展開の中、沢田は持ち前のロードレース経験を生かし、終盤でも落ち着いて周回を重ねる。

最終8周目では、前を行く北林選手を見極めて一気に加速。ファイナルラップは1分40秒台と、1周目よりも速いタイムを叩き出し、力強いスプリントでトップ通過。14分27秒09の好タイムでXCC二連覇を果たした。レース後、「最後にもがききって優勝できて、

気持ちよさが違う」と喜びを語り、翌日のXCOへの意気込みも新たにしている。



そして7月20日、同会場でもXCOが開催された。全長23・1キロ、急な上りとテクニカルな下りが連続する厳しいコースに79名が集う。沢田は「優勝するため準備してきた」と意気込み、スタートから北林、平林らと激しい先頭争いを展開。序盤はわずかなタイム差で推移するも、中盤以降で沢田が仕掛け、徐々に北林選手との差を広げていく。

上りセクションで沢田が得意のペースを守り着実に差を開く一方、北林選手は下りで追撃。しかし4周目以降、沢田が再び強さを見せ、5周終了時点で51秒差、ラスト周回ではついに1分以上のリードを築いた。最後は両手を挙げてガッツポーズ、圧巻の1時間26分45秒94でフィニッシュ。堂々たる走りでXCOも制し、2日間で全日本二冠の偉業を達成した。

「走っている時は楽しむ余裕はなかったが、振り返るとすごくいい勝負だった」という沢田。表彰台では「リカバリーしてまたライバルたちと素晴らしい戦いができるような頑張りたい」と次戦へ向けて抱負を語った。今季はロード・グラベル・シクロクロスと多彩なカテゴリーで快進撃を見せる沢田の挑戦はこれからも続く。





Astemoと宇都宮ブリッツェン、 新たなメインパートナー契約締結

宇都宮ブリッツェン、 新たなパートナーシップで 地域から世界へ走り出す

宇都宮ブリッツェンを運営するサイクルスポーツマネジメント株式会社は、2025年8月1日付でAstemo株式会社とメインパートナー契約を締結した。これにより、8月31日開催の「シマノ鈴鹿ロードクラシック」からはAstemoのロゴを冠した新デザインのレースウェアやチームサポートカーで臨み、10月中旬以降のレースからは名称を「Astemo 宇都宮ブリッツェン」に改め、新体制で活動を展開していく。

Astemo社は2021年設立のモビリティ関連企業で、自動車・二輪車向けの先進パワートレインやシャーシ、ADASといった分野で革新的かつ高効率なソリューションを世界に提供し、持続可能な社会の実現を目指している。

今回のパートナーシップについて、廣瀬佳正GMは「先進的なモビリティ技術を世界に広めるAstemo社を迎えられることは大変光栄」と語り、強化された体制への期待を示した。宇都宮ブリッツェンは地域に根差しつつ世界を目指すビジョンを掲げ、ロードレース活動にとどまらず、自転車安全教室や補助輪卒業プロジェクトなどを通じ地域貢献にも注力してきた。自転車は子どもにとって「初めてのモビリティ」であり、交通ルールを学ぶ入口でもあるとの考えから、教育的役割も重視している。

Astemo社との新パートナーシップは、未来のモビリティ教育をさらに拡大するとともに、国内だけでなくアジア・欧州のUCIレース挑戦を見据えた国際的な飛躍の後押しとなる。地域の力を世界へ発信し、新たなステージを切り拓く宇都宮ブリッツェンの挑戦に注目が集まっている。

私たちは宇都宮ブリッツェンを応援しています。

Astemo



Thank you for your support.

Blitzen 3